

「いのちあるを知る大桜」

埼玉県川口市正覚寺住職 中野尚之

自坊（お寺）の山門をくぐるとすぐに、大きなソメイヨシノの大樹が大きな傘を広げのように緑の葉を茂らせています。

この桜は、寒さが穏やかになる頃には境内が明るくなるほど見事に花を咲かせ、ようやく涼しくなる頃から厚く育った葉を、はらはらと落とします。葉の色の美しさは、緑・赤・黄色と、春に咲かせる花に負けないほどの深い味わいを見せてくれます。

春先、檀家のご婦人がお参りにおいでになり、ご一緒に木の下に立ち花を愛でておりました。するとこのご婦人が、「私、気がついたら八十六になりました、あと何度この桜を見ることができるとかと思うと、散る花を見るのは寂しいものです」とおっしゃるのです。私は、「この方の思いをしっかりと受け止めよう」と考えておりました。

この時に脳裏に浮かんだのは、昨年暮れに遷化（他界）した一つ年上のご本山での修行仲間のことでした。五十一という年齢で人生を閉じるのは早すぎるという思いと、私自身これまで生きた年月よりも、最期の時に至る月日の方が早く訪れることを深く意識させられ、十代からの仲間との別れとともに、ひと月ほど沈んだ心持ちで過ごしておりました。

お釈迦様は人生を「生老病死」の四苦である^{あき}と証らかになされました。これを自己のこととして味わい、受け入れる事こそ仏様のお智慧をいただいた穏やかな人生であります。

私とお花見をして下さったご婦人は、限りあるこの尊い命を、桜の命に見出された言葉であったと受け止めました。

大本山總持寺御開山瑩山禪師さまは、坐禪の指南書である『坐禪用心記』に「常に大慈大悲に住して、坐禪無量の功德、一切衆生に回向せよ」とお示しく下さいました。

坐禪という仏さまの行に身をおきながらも、「人の生きるさみしきや切なさを知るものであれ」と励まして下さっていると心得ております。

今年も暑い夏に向かって、この大桜とともに四季を味わい、「いのちある」ということの大事を忘れぬよう過ごしたいものです。